









## 6年生修学旅行 part I

昨日9日(月)~本日10日(火)まで、6年生は長崎に修学旅行に行ってきました。出発式では、「この修学旅行では『 帯西ブルー』の心を伸ばしたいです。特にフィールドワークでは、平和について学んでいきます。戦争の恐ろしさを知り、日常の大切さを知りたいです。」という声が聞かれ、修学旅行に臨む強い意志を感じました。平和学習は、長崎市のホテルで始まりました。そこでは、長野靖男さんから、被爆体験を聞くことができました。長野さんは、2歳のときに被爆され、その後の生活は極貧に喘ぎながらも生き抜いてきたことや、同じ被爆者団体協会の渡辺千絵子さんから学んだことも併せて伝えていただきました。お話の中で印象に残ったのは、「人間は目の前にある困難に立ち向かい、それを克服する中で強く美しくなっていく。」という言葉です。自らの被爆体験の辛さを克服されてきた言葉には、深い重みがありました。その話を聴いた子供は「僕は帯西ブルーが伸びました。お話の中でケンカを無くすことが平和をつくっていくこととありました。僕も弟と小さいケンカをするので、それを無くしていきたいです。」と感想を述べました。日本被団協がノーベル平和賞を受賞され、その授賞式前日に聴くことのできたタイムリーな講話は、子供たちの心を打った様でした。



被爆体験講話

その後、昼食のトルコライスに舌鼓を打ち、修学旅行の本命であるフィールドワークを行いました。各班に一人ずつボランティアガイドさんについていただき、原爆の被害を受けた場所や施設を自分たちの足で歩きました。子供たちにフィールドワークで伸びた心と感想を聞くと、「：戦争はよくないと思ったし、これから学校に帰って平和学習を進めていき、5年生や親にも伝えようと思います。」「：浦上天主堂の鐘楼が、原爆の爆風で飛んだのを見て驚きました。人の命の重みを感じました。」「：戦争下で大変だったことがあったことはわかっていただけ、実際に現場に来て、画像や実物に触れると、原爆の被害は二度と起こさないように世界が手を結ぶべきだと思うし、学校でも委員会などで力を発揮していこうと思った。」「：日本が戦争をしたのは、戦争に反対する社会の心がなかったから戦争になったのだと思う。戦争は絶対に繰り返すべきではないです。」「：ネットで検索してもわからないことが、現地で学ぶことで得ることがたくさんありました。浦上天主堂の鐘楼は人々が力を合わせて守ってきたことがわかりました。」など子供たちにとって深い学びとなったようです。また、フィールドワークの後には、原爆資料館の地下にある、追悼空間という場所で平和集会を行いました。その中で核兵器を地上から無くすために「すべての命を大切にします。長崎の今を築く礎となった人々の勇気と努力に学び、一生懸命勉強し、夢と希望をもって頑張っていきます。そして、みんなが幸せに過ごせる世の中をつくっていく大人になります。」という言葉が印象的でした。追悼空間で歌った「あすという日が」は、美しい歌声が館内に響き渡り、その歌声を聴かれた、職員の方々も感動されていました。現地の空気を肌で感じたからこそ、そこで得た平和への思いを胸に、集会に臨むことができたと思います。



フィールドワーク



原爆資料館見学